

# *Jude the Obscure* について

宮 本 義 久

## On *Jude the Obscure*

YOSHIHISA MIYAMOTO

### I

*Jude the Obscure* (1895)〔以下 *Jude* と略す〕を最後として、Hardy は小説から詩へと転じた。小説家 Hardy と、詩人 Hardy と、どちらを重視するかは、人により異論のあるところであるが、それはともかく、小説執筆断念の最大の理由は、Hardy 自身、元来、詩作の方に興味を持っていて、小説はいわば、生活の手段と考えていたということと共に、*Jude* の発禁・焚書事件によって代表される、Victoria 朝の、道徳的、宗教的方面からの、非難・攻撃に嫌気がさしたためであると、というのが通説である。その大胆な性の扱い方と反宗教的態度が、当時の prudery にショックを与え、この書を下品で、背徳的と排撃させたのである。

前作 *Tess of the d'Urbervilles* において、Hardy は、自然主義的傾向を強く示し、その関心を、理想化された牧歌的世界から、現実の苛酷な社会へと転じ、因習的道德・貧困・階級的偏見などの社会悪を告発した。この社会批判小説的傾向は、*Jude* においてもそのまま引き継がれ、貧困階級に対する大学の排他性とか、キリスト教社会における結婚・離婚及び因習的行動規範の問題が、批判の二大対象となる。後者は、当時国内を賑わせた離婚事件や、Ibsen 劇の影響と見るのが一般的見方であるが、作者自身の結婚生活における面倒なもつれと、全く無関係ではないように思われる。しかし、*Jude* は、単なる社会批判小説ではない。それは、Victoria 朝後期のさまざまな問題をはらんだ、社会的・道徳的不安・混乱状態の全体像を示そうとするものであった。批判も当然、そこに付随するものである。J. W. Beach は、*Jude* について、‘the guiding principle and source of interest are found in pitiless and searching truth’ ①としているが、Hardy のこの最終小説は、これまで時代のお上品な読書界、出版界の制約に縛られてきた作者の、長年の obsession の総清算であつたろう。多分、Hardy には、これ以上小説の形では、言うべきことはなかった筈である。

### II

*Jude* は、19世紀後半の社会的、道徳的混乱の中にあつて、一人の貧しい孤独な少年が、心

の抛り所を求め、幸福を獲得しようと努力するが、実は、彼は、時代の混乱した社会環境に巻き込まれ、流されるのであって、結局、その犠牲となる物語である。再び Christminster に舞い戻ってきた Jude は、家庭悲劇の起る直前に、次の様にこれまでの彼の一生を概括する：

“However, it was my poverty and not my will that consented to be beaten.... I was, perhaps, after all, a paltry victim to the spirit of mental and social restlessness that makes so many unhappy in the day.... I am in a chaos of principles—groping in the dark— acting by instinct and not after example. Eight or nine years ago, when I came here first, I had a neat stock of fixed opinions, but they dropped away one by one; and the further I get the less sure I am. I doubt if I have anything more for my present rule of life than following inclinations which do me and nobody else any harm, and actually give pleasure to those I love best....” [pp. 387—8]

Jude は、特殊な個人の悲劇ではなく、特殊な時代背景の枠の中での悲劇という、典型性を獲得する。

この ‘the spirit of mental and social restlessness’ について、もう少し見てみたい。Hardy は、従来の多くの作品において、都会生活を否定し、田園を牧歌的世界、理想郷として眺める立場を取ってきた。Tess においても、この田園生活賞讃の態度は一部残り、Talbot-hays の酪農場の描写に見られる。しかし、真実を見つめる目から見た時、それは、ノスタルジーであり、アナクロニズムでしかない。Jude に描かれる農村は、風景も人物も、Jude にとって、反感を催すべきものでしかない。作者は、村に対する Jude の反感を、一部は、異郷人なるが故の、その地の過去に連なる連想の欠如に帰している。巻末において、Jude が、Christminster に最後の居所を定めて舞い戻るのは、そこが昔の夢と思い出につながる心の故郷であることを考慮すれば、それは納得の行くことである。しかし、村の過去への生活の連想として、作者が掲げるもの [p. 9] と Christminster の中心 Fourways の過去の連想 [p. 137] とは、ほとんど同じ物であり、まして、外部からの影響で村が大きく変貌して、歴史の跡もとどめぬものであれば、[p. 6] 作者が、現実の農村生活の方を、特に上位に見ているとも思われない。Jude による田園生活の価値の否定は、必然である：

It had been the yearning of his heart to find something to anchor on, to cling to—for some place which he could call admirable. [p. 22]

Hardy は、Tess の中で、資本主義的農業家の発生による、‘agricultural unrest’ について言及し、より良いチャンスを求めての農村人口の移動、都市への流出、それに伴う農村の生活の変化と農民の故郷喪失を説いた（第51章）。Tess は、都会文化に敗れてゆく農村文化の悲劇の象徴であるとしたのは、D. Brown であり、A. Kettle も、同様なことを言っているが、②その観点から見る時、Jude は、Tess の終わったところから始まるものであると、言い得るであろう。Jude 少年の読書好みと、農村への不満は、自づと時代の social restlessness に通じ

るものがあり、その道の先輩 Phillotson の、別れに当っての一言で、Christminster への夢がふくれ上る。1888年4月28日の日記には、

A short story of a young man —“who could not go to Oxford”—His struggles and ultimate failure. Suicide.... There is something [in this] the world ought to be shown, and I am the one to show it to them—...⑨ [pp. 207—8]

とあって、この *Jude* の当初の計画と目的を示している。これは、創立本来の目的を忘れて、金持の息子用のものになり下り、貧乏人に門戸を閉ざした大学の不条理に対する批判を意味するものと考えられるが、果して、それだけであろうか。Hardy は、石工の仕事自体に興味を持ちながら、文明の人工の所産たる、modern vice of unrest に罹って、大学に憧れる Jude にも批判を加えるのである：

For a moment there fell on Jude a true illumination, that here in the stone yard was a centre of effort as worthy as that dignified by the name of scholarly study within the noblest of colleges. But he lost it under stress of his old idea.... This was his form of the modern vice of unrest. [p. 96]

しかし、*Jude* の最大の問題は、信仰対懷疑、社会の慣行・制度・道徳対、J. S. Mill 流のリベラリズムの対立であり、それは、結婚・非結婚問題を中心として展開される。*Jude* は、Sue によって時代の mental restlessness に巻込まれ、聖職への道を放棄し、信仰を初めとする伝統的生活信条を失い、同棲というキリスト教社会のモラルに反する行為のため、社会から迫害される。そして Sue の信仰への逆戻りにより、*Jude* の悲劇は完成する。

Hardy は、結婚について、

The purpose of a chronicler of moods and deeds does not require him to express his personal views upon the grave controversy.... [p. 341]

と述べて、自己の賛否の態度を明らかにすることを回避し、*Jude* を、時代の対立するモラルの抗争の犠牲と見ようとする姿勢を保とうとしている如く見える。

Hardy にとって、結婚は、不幸とは言わぬまでも、必ずしも幸福を約束するものではない。彼は、‘the antipathetic, recriminatory mood of the average husband and wife of Christendom’ [p. 350] と、結婚による夫婦相互間の優しさの冷却と不和という問題に触れ、既婚夫婦と、同棲のままの *Jude* と Sue の二人を、しつこい程に、皮肉に対照して見せるのである。即ち、*Jude* の許に引き取られた Little Father Time をして、Sue の “Do I look like your father’s wife?” の問いに、 “Well, yes; ’cept he seems fond of you, and you of him....” [p. 329] と答えさせる。Stoke-Barehills の農業共進会で、*Jude* と Sue を見守る Arabella に、 “...I fancy they are not married, or they wouldn’t be so much to one another as that....” [p. 345] と言わせ、更に又、Christminster の下宿屋の妻君をして、初対面の Sue に、 “Are you really a married woman?” [p. 392] と質問させる。*Jude* が、Arabella と再結婚後住んでいる下宿の主の抱く次の感想に至っては、Hardy の皮肉のしつこさも度が過ぎて、こっけい味すら帯びてくる：

The landlord of the lodging, who had heard that they were a queer couple, had doubted if they were married at all, especially as he had seen Arabella kiss Jude one evening when she had taken a little cordial; and he was about to give them notice to quit, till by chance overhearing her one night haranguing Jude in rattling terms, and ultimately flinging a shoe at his head, he recognized the note of ordinary wedlock; and concluding that they must be respectable, said no more. [pp. 459—60]

とは言え、Hardy は、結婚そのものを批判しているのではない。問題は、いかなる場合にも、結婚を要求し、結婚した後は、法的にほとんど離婚を不可能にしているキリスト教社会のモラルである。作者は、明らかに、Jude と Sue の様な生き方を認容している。Jude は、信仰の道へ戻って、彼を去った Sue に、

“Don’t...be unmerciful. Sue, Sue! we are acting by the letter; and ‘the letter killeth!’” と叫ぶが、すべてを形式的に一般論で律することなく、例外を認める寛容さを、Hardy は主張するのである。

Jude における19世紀後半の社会環境の描写から、必然的に浮び上ってくる批判の二大対象は、この大学と結婚の問題である。社会改良主義者 Hardy は、巻末において、Jude に、未来における大学の門戸開放と、社会の脱因習化の見込み・希望を語らせている。

### III

ここで Jude を、別の面から見てみたい。Sue は Jude を評して、見る人ヨセフ、悲劇のドン・キホーテと呼ぶが、[p. 242] Jude は、理想と現実の矛盾・葛藤から生じる悲劇とも言い得よう。そして、その理想とは、不条理や残酷さのない世界の夢である。Jude は、感受性の強い少年で、何であれ、苦痛を与えるに耐えられず、みみずをふみつぶさないよう、つま先立って歩く程である。畑の鳥追いに雇いながら、自分と同じく、この世に用のない彼等に同情し、その食欲を妨げるに忍びず、雇主に見つかり、したたかどやされて、解雇される。そして、思うのである。大きくなると、様々な責任が生じてくる。世の中の出来事と、自分の考えてきたこととは、うまく合致しない。自然の論理は、気にしてはいられない程恐ろしく、ある生き物に対する慈悲は、他の生き物に対する残酷となる。それが自分の調和感を乱す。何とかして大人にはなりたくない：

As you got older, and felt yourself to be at the centre of your time, and not at a point in its circumference, as you had felt when you were little, you were seized with a sort of shuddering, he perceived. All around you there seemed to be something glaring, garlish, rattling, and the noises and glares hit upon the little cell called your life, and shook it, and scorched it. [p. 14]

彼の感受性は、生き物の世界の論理の恐ろしさ、現実生活における生存競争のどぎつさ、おぞましさに耐えられず、それから、できるだけ離れ、無関係でいたいと願うのであるが、この願望は、Marygreen とは別世界 [p. 13] の学都 Christminster への非現実的な夢となって投

射され、そこを倅せの象徴、新しきエルサレム、光明の市と、美化するに至る。即ち、彼は、残酷で illogical な Nature's logic の作用する場である、physical な世界から、論理的な知性の世界に入ることによって、その作用から逃れることを夢みる訳である。

Jude のこの感受性は、明らかに人生への不適応を暗示するもので、作者自身も、この少年の運命を予告し、

This weakness of character, as it may be called, suggested that he was the sort of man who was born to ache a good deal before the fall of the curtain upon his unnecessary life should signify that all was well with him again. [p. 12]

と言うのであるが、しかし、Hardy は、Jude の繊細な感情そのものの妥当性を信じ、又、Jude の動物への愛は、人間への公正に通ずるとしているのである。そして、もし彼が、敗北するとすれば、その責は、非現実的だが、心優しい理想主義者 Jude にあるのではなく、不条理で、残酷な社会や自然にあると考えたのである。(cf. the scorn of Nature for man's finer emotions, and her lack of interest in his aspirations [p. 208])

生存の争いに巻き込まれて、自他に苦痛を与えたくないという願いにも拘らず、生身の人間である Jude は、その中に巻き込まれざるを得ない。それは、外的環境の力によってではなく、自分の内的環境の力、性という自然の力によってである。作者は、Jude の序文の中で、この小説は、人間の知る最も強力な passion の跡を追って押し寄せてくる焦燥と興奮、愚弄と災難をありのままに扱い、宿願が果されずに終わった悲劇を、気取らずに指摘しようとする、成人男女向けの小説と、述べているが、この人間の知る最強の passion のため、これまで、性を人生と目的の外側にあると感じていた Jude も、簡単に Arabella の罠にかかってしまう。

In short, as if materially, a compelling arm of extraordinary muscular power seized hold of him—something which had nothing in common with the spirits and influences that had moved him hitherto. This seemed to care little for his reason and his will, nothing for his so-called elevated intentions, and moved him along...in a direction which tended towards the embrace of a woman for whom he had no respect, and whose life had nothing in common with his own except locality. [p. 45]

この様に説明されるものが、性の力とすれば、Jude は既に 'predestinate Jude' [p. 45] でしかない。それ故に、彼の価値観は一変して、大学を卒業するよりも、牧師、否、教皇になるよりも一人の女性を愛する方が良いと、思うようになるのも無理からぬことである。又、妻と別れて後、初めて Christminster へ出るきっかけとなったのは、Sue の写真を見て興味を起してからであった。学問は二次的なものになり、大学の夢の挫折も、それ程大きな傷手とはならない。以後、Sue を愛するあまり、その傀儡となって、世間の迫害をうけるのも、一つには、この性の力に流されるからでもある。

この様に見ると、Judeの悲劇を、社会の不条理だけに帰してしまうことは疑問で、結局、自

然の本能と、社会の人工的システムとの葛藤の中に、彼の悲劇は醸成されていると見るのが、Hardy 的見方であろう。

ここで、Jude の性の対象となる Arabella と Sue について考えてみたい。

次に引用する個所は、Christminster の夢にふけて歩いている Jude の気を引くために、Arabella が去勢豚の penis を投げつけ、(露骨なシンボルである。ノ) Jude がそれを Arabella に返すところである。ここは、二人の初対面のシーンで、Arabella は、養豚業者の娘で、小川の向う岸で、豚の内臓を洗っていたのである。

They walked in parallel lines, one on each bank of the stream, towards the small plank bridge....

They met in the middle of the plank, and Jude held out his stick with the fragment of pig dangling therefrom, looking elsewhere the while and faintly coloring. She, too, looked in another direction, and took the piece as though ignorant of what her hand was doing. She hung it temporarily on the rail of the bridge, and then by a species of mutual curiosity, they both turned, and regarded it. [pp. 40-41]

ここで象徴的に示されるのは、Jude と Arabella が、動物的な肉という一点だけで一致することである。二人の関係は、Samson と Delilah の絵によって象徴されているが、Arabella の狙いは、Jude に直感的に肉体的魅力を感じたことと共に、結婚によって生じる威厳と物質的利益でもある。ここで注意すべきことは、Arabella は、肉欲的ではあるが、それ程悪女ではないということである。彼女の結婚観は、世間一般の考え方であり、Jude を性の罠にかけたのも、すれた友人の入れ知恵によるものであり、結局、環境の所産である。Jude は、性の力により、川向うの野卑な世界にひきずり込まれるが、sexual fulfilment は、Hardy の場合、冷却を意味する。Christminster という自己実現の夢の追求と Arabella の名誉を守るための結婚という二者択一——生き物の世界の、どぎつい、おぞましい生存競争——の立場に巻き込まれ、Arabella を傷つけるに忍びず、自己を否定して、「責任」を取らねばならなくなる。結婚後は、生活のため、自家の飼豚の屠殺という Nature's logic を、自らの手で行わねばならぬ仕儀となり、妻に 'tender-hearted fool' と、罵倒される始末である。彼を結婚の罠にかけするための Arabella の偽瞞もすべてばれて、この世の醜くさに絶望し、自殺を計りさえするのである。Arabella の永遠の家出は、救いの如く、見えるのであるが、過去は消えることなく、未来に尾を引くのである。

Sue は、Hardy の描いた多くの興味ある女性達の中で、最も複雑で、謎の女性であり、Jude への関心の大半は、彼女によると言っても、過言ではない。しかし、今はさし当り、主人公 Jude を中心に、彼女の役割を考えてみたい。Jude が、Sue の存在を知るのは、大叔母の家で、その写真を見てであるが、その様は、次の様に記されている：

[Jude] observed between the brass candlesticks on her mantel-piece the photograph of a pretty girlish face, in a broad hat, with radiating folds under the

brim like the rays of a halo. [p. 88]

これは、正に礼拝される聖処女のイメージである。Jude の心には、この姿がこびりつく。延び延びになっていた、懸案の Christminster 行きを、早速実行するのも、彼女がそこに住んでいると聞いてである。(同じことが、後の Melchester 行きの決定の際にも起る。)かかるイメージでとらえられた Sue への憧れは、肉欲のため、Arabella との醜い生活へ巻き込まれた苦い経験に対する反動であるとも、言い得よう。幼時の Christminster 生活への憧れの誕生と同じ過程が、繰返される訳である。そして、これは、Sue の勤務先である教会用具店で初めて彼女の姿を盗み見する時の、Jude の感想の中に、よみ取ることが出来る：

He felt very shy of looking at the girl at the desk; she was so pretty that he could not believe it possible that she should belong to him....and he recognized in the accents certain qualities of his own voice; softened and sweetened, but his own....She seemed so dainty beside himself in his rough working-jacket and dusty trousers that he felt he was as yet unready to encounter her....And how possible it was that she would scorn him, as far as a Christian could, particularly when he had told her that unpleasant part of his history which had resulted in his becoming enchained to one of her own sex whom she would certainly not admire. [pp. 100—101]

彼の粗末な装いと、Arabella との前歴に比して、Sue の上品な姿は、Jude にひけ目を感じさせるのであるが、自分の血縁者である Sue の中に、自分の理想の姿を見るところは、一寸 narcissistic な匂いが感じ取られる。

A. Alvarez は、Arabella と Sue は、‘projections of Jude, sides of his character’ ④と正しくも言っているが、Sue 的な知性と洗練に憧れると同時に、Arabelle 的な性に支配されるというディレンマを、Jude は内蔵している訳である。Hardy によれば、性は、人間の最強の passion であり、Jude は、この力に押し流されてゆくのである。彼の聖職志望の放棄や、神学及び倫理書の焚書も、仔細に点検すれば、Sue の懐疑思想の影響というよりも、むしろ、それ等が、Sue への passion と対立し、邪魔になるからであることが分る。又、社会のモラルに反して同棲し、その結果、社会から制裁を受けるという、生存の現実の中に巻き込まれるのも、その極めて微弱で、潔癖な性的本能、結婚という「鉄の契約」が相互の愛を消すという恐れ、両親及び自分自身の結婚の失敗、などから、Sue が結婚を恐怖するためであると共に、Jude がその感受性のため、Sue に対する不当な強制を好まず、Sue の要請を受け入れるからである。作者は、この辺の事情について、ある友人への手紙の中で書いている：

One point...I could not dwell upon: that, though she has children, her intimacies with Jude have never been more than occasional, even when they were living together..., and one of her reasons for fearing the marriage ceremony is that she fears it would be breaking faith with Jude to withhold herself at pleasure, or altogether, after it; though while uncontracted she feels at liberty to yield herself as seldom as she chooses. This has tended to keep his passion

as hot at the end as at the beginning, and helps to break his heart. He has never really possessed her as freely as he desired. ⑤

矛盾した性の、恐るべき姿と言うべきであろう。そこには、男性の性の、女性に対する残酷さも含まれている。悲劇後、Jude は、‘a distinct type—a refined creature, intended by Nature to be left intact’ [p. 408] である Sue に対して、自分は、*seducer* であったと、自らを、責めるのである。

A. J. Guerard は、子供の死後の Sue の信仰への転向を、彼女の自己処罰衝動、憎悪する自己を破壊しようとする、道徳的マゾヒズムにあると見た⑥が、その見解は正しい。彼女が、15ヶ月も同棲しながら、体を許さず、遂に悶死させた、昔の男友達や、Phillotson, Jude に対する態度は、すべて、まずサディックに、苦痛を与えておいて、後で償いをするのが、彼女の常道である。単に、悲劇に遭遇して、リベラリスティックな生き方が怖くなり、自己否定という教義原理に走ったということの説明しつくされないものを、彼女は持っているのである。

そして、残る問題は、Jude と Arabella の子供 Little Father Time である。

この少年の義弟殺害と自殺程、身の毛のよだつ出来事は、まず他に類を見ないものであり、現実のものとは、認められないであろう。彼は、自分達子供は、不要者で、親の難儀の因であり、子供が多過ぎるという、マルサス的な考えから、殺すという理由をつける。そして、このあり得べくもなさそうな事件を、Jude の悲劇の最大の山に持って来た事は、リアリズムの点から見れば、この上ない瑕疵であろう。この少年は、新しい世代の、生きたくない意志（‘the coming universal wish not to live’ [p. 400]）のシンボルである。作者は、Phillotson—Jude—Little Father Time という、三世代の系列を示している。三者の間の年令差は、約20才で、巻頭で Christminster 入学を志して村を去る Phillotson は、およそ30才で、Jude が生を呪いながら死ぬ年令であり、Jude の自分は不要者であるという意識を抱いての初登場は、11才で、Little Father Time の自殺の年令に相当する。Christminster の夢と、licentiate としての教会入りの志望の挫折、Sue との別居又は同棲のため、世間の指弾をうけ、職をうばわれる点など、Jude は、Phillotson の経験を繰返す。Little Father Time は、Jude が、30才にして到達した、生きる意志の否定に、11才にして到着しているのである。Jude の幼時の如く、この誰にも望まれない、厄介者の少年は、幸福追求の努力が無駄であることを、経験せずして、人生の概念的把握によって、知っている。彼の陰気な人生観は、80才の老人のような顔に現われており、彼は笑いを知らず、何事にも関心を示さない。彼は、何事も先のことが解ってしまっている。花を見ても、数日にしてしおれることを考えて、楽しめないのである。作者が、この少年に託した象徴的意味は、その死顔についての描写に、明確に表現されている：

The boy's face expressed the whole tale of their situation. On that little shape had converged all the inauspiciousness and shadow which had darkened the first union of Jude, and all the accidents, mistakes, fears, errors of the last. He was



their nodal point, their focus, their expression in a single term. For the rashness of those parents he had groaned, for their ill-assortment he had quaked, and for the misfortunes of these he had died. [p. 400]

## IV

*Jude* は、以上の如く、単なる社会批判小説ではない。成程、悲劇の直接的原因は、社会にあるが、それは、いわば氷山の海面上に現われている部分にすぎない。*Hardy* は、ある友人への手紙の中で、*Jude* と *Sue*〔尤も彼女の場合は自己中心的感受性だが〕の極度の感受性を、遺伝であると説明している（‘hereditary temperament peculiar to the family of the parties’ ⑦）が、この遺伝的気質と性という自然が、この小説の悲劇に大きな役割を演じていることは、見逃せない。尤も、この遺伝なるものが、どの程度例外的なものであるかが問題であり、その点に、この作品の説得力及至、読者への訴える力が、かかっていると言い得よう。*Hardy* は、*Sue* について、

*Sue is a type of woman which has always had an attraction for me....*⑧

と、述べており、新しい知的な型の女性ではあるが、決して異常な人物ではないと、考えていたのである。*Sue* 自身も、決して彼女が例外的な女性ではないことを、*Jude* に主張する：

“We are horribly sensitive; that’s really what’s the matter with us, Sue!” he declared.

“I fancy more are like us than we think!”

...

*Sue* still held that there was nothing queer or exceptional in it—that all were so. “Everybody is getting to feel as we do. We are a little beforehand, that’s all. In fifty, aye, twenty years, the descendants of these two will act and feel worse than we. They will see weltering humanity still more vividly than we do now, as

‘Shapes like our own selves hideously multiplied.’  
and will be afraid to reproduce them.”

“What a terrible line of poetry!...though I have felt it myself about my fellow creatures at morbid times.” [pp. 338—9]

これは、*Sue* の結婚拒否の言い訳とも解せられるかも知れないが、それだけではない。彼女の、子供をこの世に生み出す権利についての疑問 [p. 368] に続き、*Little Father Time* は、この予言の実現となるのである。遺伝とは言うものの、彼等は、感受性の発達した、新しい人間なのである。

*Jude* は、感受性の悲劇とも呼び得るものである。*Phyllotson* は、

“Cruelty is the law pervading all nature and society; and we can’t get out of it if we would !” [p. 377]

と嘆息するが、この宇宙の不条理こそ、感受性の発達した人間なればこそ、否応なく、ますま

す痛切に味わわねばならないことなのであり、彼を、ますます人生の不適應者ならしめるものなのである。神の摂理への信仰は、必然的に否定され、代って、宇宙を支配するのは、詩的想像によって、First Cause と名のつくペシミスティックなものとなる：

The world resembled a stanza or melody composed in a dream; it was wonderfully excellent to the half-aroused intelligence, but hopelessly absurd at the full waking;... the First Cause worked automatically like a somnambulist, and not reflectively like a sage....at the framing of the terrestrial conditions there seemed never to have been contemplated such a development of emotional perceptiveness among the creatures subject to these conditions as that reached by thinking and educated humanity. [p. 407]

そして、これが、*Jude* の思想的背景となる、宇宙哲学であり、後の叙事詩劇 *The Dynasts* の中に、'Immanent Will' として示されるものであることは、更めて言う必要もないことである。そして又、このペシズムが、人間に対するやさしさ、あわれみの情とまざって、彼の詩の基調を形成するのである。

Hardy は、人生を悲劇的と捉えた。そして、彼の宇宙哲学は、その悲劇性の原因を説明しようとするものである。*Jude* は、内的、外的力の犠牲となって破滅する悲劇であり、作者によれば、その責任は、*Jude* にはないのである。成程、*Jude* には、Aristotle が、その悲劇の定義において挙げる憐憫と恐怖は、充分に感じとられる。しかし、*Jude* は、内外の運命の力に抗することなく、流されてゆくだけである。我々は、彼に悲劇的英雄の姿を見出すことは出来ない。偉大なる敗北の中の、偉大なる勝利感、悲惨と栄光との同時的感覚を、*Jude* において、我々は捉えることは出来ない。*Jude* の倭小感は免れない。それは、Hardy が、宇宙観の構成にあたって、人間を動物学的存在として捉えた結果である。*Jude* に似て、憐憫の心厚い Hardy は、人間を哀れみ同情する余り、宇宙に責任を押しつけ、人間を弁護することで、人間を倭小化し、敗北主義の立場を取るようになったと言えないであろうか。

註 [Text は Modern Library 版を使用]

- ① J. W. Beach: *The Technique of Thomas Hardy*, p. 218 (Russell & Russel, New York, 1962)
- ② Douglas Brown: *Thomas Hardy* (Longmans, London, 1967) Arnold Kettle: *An Introduction to the English Novel*, vol II, IV (Kinokuniya, Tokyo, 1961)
- ③ F. E. Hardy: *The Life of Thomas Hardy*, pp. 207—8 (Macmillan, London, 1965)
- ④ A. F. Guerard (ed.): *Hardy: A Collection of Critical Essays*, p. 121 (Prentice-Hall, Englewood Cliffs, N. J., 1963)
- ⑤ F. E. Hardy: *The Life of Thomas Hardy*, p. 272
- ⑥ A. J. Guerard: *Thomas Hardy*, pp. 112—3 (New Directions, New York, 1964)
- ⑦ F. E. Hardy: *The Life of Thomas Hardy*, p. 271
- ⑧ Ibid., p. 272